

# BS (A) 型アラーム弁取扱い説明書

## 湿式流水検知装置（自動警報弁型）

検知流量定数 50・60 併用型

BS 125－50(A) 型 (125A)

BS 150－50(A) 型 (150A)

### ご使用前に必ずお読み下さい

このたびは弊社BS型流水検知装置をご採用下さいます、誠にありがとうございます。この取扱い説明書は、流水検知装置（ここでは、アラーム弁ともいいます）を正確かつ安全にご使用頂くための製品の取扱い方と注意事項などにつき説明いたしております。流水検知装置をお取扱い頂く前に本書全部をよくお読み下さいます、ご理解の後、ご使用下さいますよう、お願い申し上げます。尚、ご施主様の方へは施工者様から本書の内容をよくご説明頂きます、お渡し下さいますようお願いいたします。この取扱い説明書は設置後の維持管理にも必要です。本書はいつでも見られる場所に大切に保管しておいて下さい。

尚、流水検知装置は消防法の適用下にあります。構造、性能はもちろん、設置対象物、設置条件、施工、取扱い及び、保守管理についても、その適用を受けます。

**注意**  安全のために注意事項をまもらないと人身事故、水損事故、消火不能事故になることがあります。

**アイエスアリンクラー株式会社**

〒648-0003 和歌山県橋本市隅田町山内 1691-5

TEL 0736-37-5835 FAX 0736-37-5836

e-mail : info@aiesu-sp.com



# 目次

.....  
**スプリンクラー配管用の使用水とフラッシングについて** ..... (P 3)

**お渡し商品の御確認及び注意事項** ..... (P 4)

**付属品の取り付け** ..... (P 5)

A. アラームスイッチの取付け

B. 圧力計の取付け

.....  
**流水検知装置の働き** ..... (P 7)

A. 流水の検知

B. 補助逆止弁

C. アラームスイッチ

D. オートドリップ

E. 信号停止弁

.....  
**現場配管上の注意** ..... (P 9)

A. 作動時間について

B. 残留空気による影響

.....  
**流水検知装置の構造と分解** ..... (P 10)

A. 流水検知装置の分解の用意

B. 主弁の取り外し

C. 主弁の分解

D. 主弁組立時の注意

E. カバーの取り付け

F. 排水弁の分解

G. 排水弁の組み立て

.....  
**オートドリップ穴の掃除** ..... (P 13)

.....  
**アラームスイッチについて** ..... (P 15)

.....  
**排水側への漏れが発生した場合** ..... (P 16)

A. 主弁からの漏れの対策

B. 排水弁からの漏れの対策

**アラームスイッチが復帰しない場合** ..... (P 17)

**定期点検時のお願い** ..... (P 18)

**仕様** ..... (P 19)  
.....

# スプリンクラー配管の使用水 とフラッシングについて

## 1、水道水を使用して下さい。

スプリンクラー配管の水は水道水を使用して下さい。貯水槽及び配管内の水は水道水を使用し、酸やアルカリ、塩分などを含んだ腐食性のある水は使用しないで下さい。

配管内の水は異物が混入していない、きれいな水を使用して下さい。

## 2、フラッシングを行って下さい。

配管内への水張り後は、流水検知装置毎に必ずフラッシングを行い、配管内の異物を配水管の方へ流し出して下さい。フラッシングは流水検知装置の排水弁（4ページの図参照）を全開近くまで開け、ポンプの送水により配管内の水を配水管側に排水して配管内の異物を洗い流して下さい。

尚、フラッシングの際は信号停止弁（4ページの図参照）を「開」にして行い、フラッシング後は、必ずオートドリップ穴の掃除をして下さい。

（13ページ「オートドリップ穴の掃除」参照）

## 警告

配管内の異物は流水検知装置の止水障害及びオートドリップ穴（絞り通水路）の詰まりの原因となります。異物がオートドリップに詰まった場合はサイレン等の信号が停らず誤報となりますので、配管内には異物のないようにして下さい。

# お渡し商品の御確認 及び注意事項

## 1、部品と数量を確認してください

流水検知装置は専用ダンボールケースに本書「BS(A)型アラーム弁取扱説明書」と共に梱包しています。箱には流水検知装置本体と、単体用標準付属品一式が入っています。

送り状に付けております出荷案内書と梱包品の品種及び数量を照合して下さい。

尚、施工手順によっては梱包をといてから全ての付属品の取付け終了までに日数を要する場合があります。付属品の紛失には十分注意して下さい。

## 2、品物が破損していた場合

当社では検定品はもちろんのこと、検定対象品以外の各付属品の品質にも万全を期しておりますが、梱包をといた時点で万が一品物に破損や変形が発生していた場合は、その状態のまま即当社へご連絡下さい。

## 3、梱包用ケース

制御弁、フランジ、その他のボルト類を合わせてご注文頂いた際は、他の品目の印刷されたパッキングケース（資源の有効利用）などに梱包している場合がありますが、必ずケース表面に手書きで品名を明記していますので、まちがわれないようにお願いします。

## 4、異物にはご注意ください

流水検地装置本体内部に異物がないことを目視確認して下さい。万一異物がある場合は取り除いて下さい。異物により機能を失う恐れがあります。

## 5、アラームスイッチにご注意下さい

アラームスイッチは精密機器です。絶対に衝撃を与えないで下さい。また前面のカバー取付ネジと結線用ターミナルネジ及びプリカソケット押さえネジ以外のネジやナットは絶対にさわらないで下さい。さわるとスイッチが作動しなくなります。(15 ページの図参照)

## 6、パッキン類について

流水検知装置には多数のリングやパッキン類を使用しています。これらは消耗品です。使用状況によっては新しいものに取り換える必要があります。

## 7、圧力計の保護

圧力計は精密機器です。絶対に衝撃を与えないで下さい。使用時には圧力計の針が緩慢な動きになるところまで圧力計用ニードル弁を絞って下さい。配管内のエアが原因で瞬間的には予想を越える圧力上昇をする場合があります、圧力計の針が振り切り故障します。ニードル弁を絞って圧力計を保護して下さい。

尚、圧力計は消耗品としておりますので針が異常な目盛り位置を示すようになった物は新品に取り替えて下さい。

## 8、凍結を起こさないようにして下さい。

この流水検知装置は湿式です。気温が下がって凍結する場所への設置はできません。内部水が凍結しますと想像を絶する高圧が発生しますので弁箱、カバー、弁体などが破壊されます。本体の破壊は水損事故を起こし、消火活動ができなくなります。

## 9、異常が発生した場合のお願い

設置後の異常や不都合が生じた場合は本書をよくお読み頂きまして対処して下さい。本書中ご理解困難な個所がありましたら弊社にお問い合わせ下さい。

## 10、当社技術スタッフによる現場での修理点検等のサービスは実費にて承りません。

# 付属品の取付け

流水検知装置の付属品には以下の物が入っています。

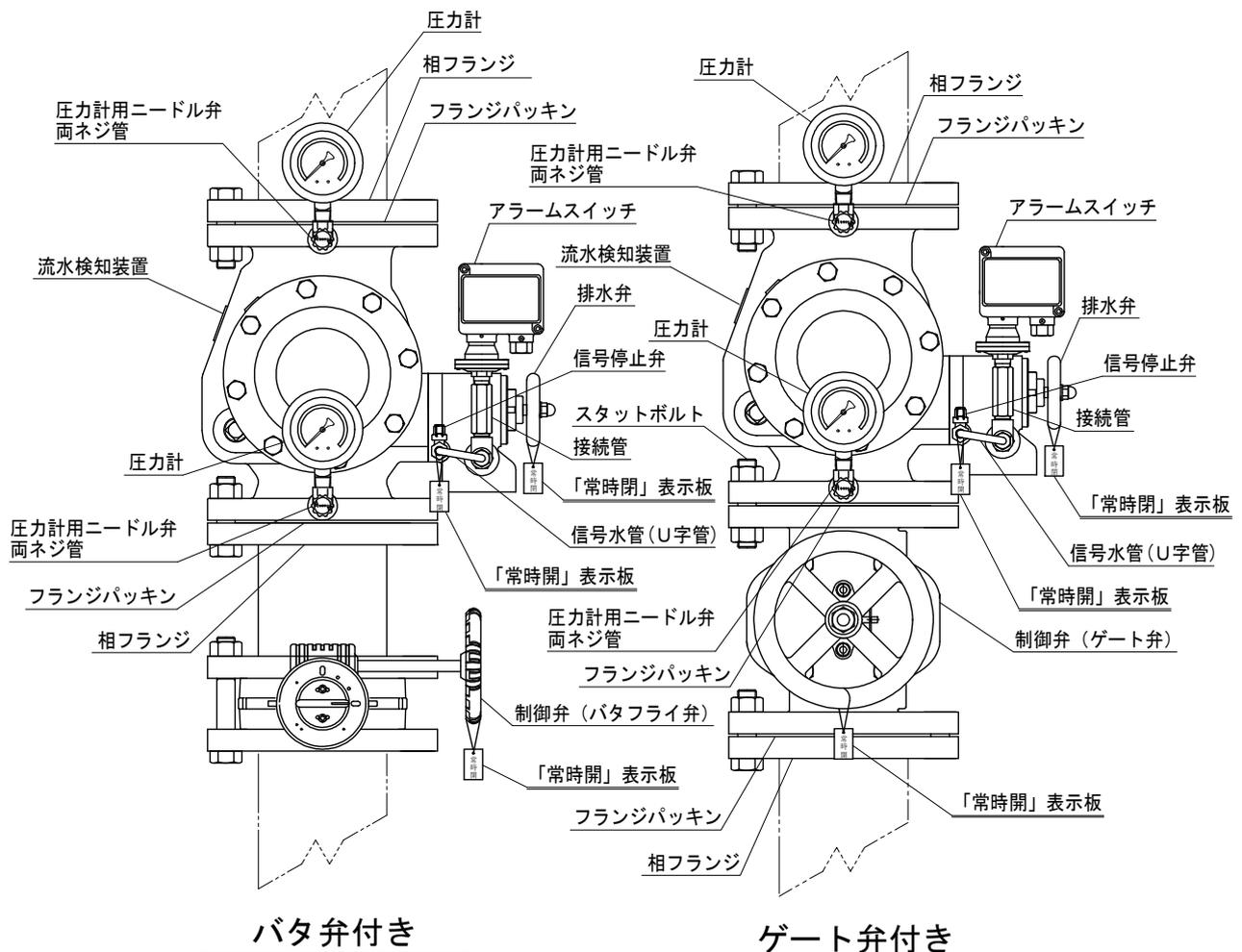
アラームスイッチ	1 個	常時開表示板	2 枚
接続管	1 個	常時閉表示板	1 枚
両ネジ管	2 個	取扱い説明板	1 枚
圧力計	2 個	取扱い説明書（本書）	1 冊
圧力計用ニードル弁	2 個		

以上の部品を下図所定の位置へ取り付けて下さい。

尚、上記は単体用標準付属品です

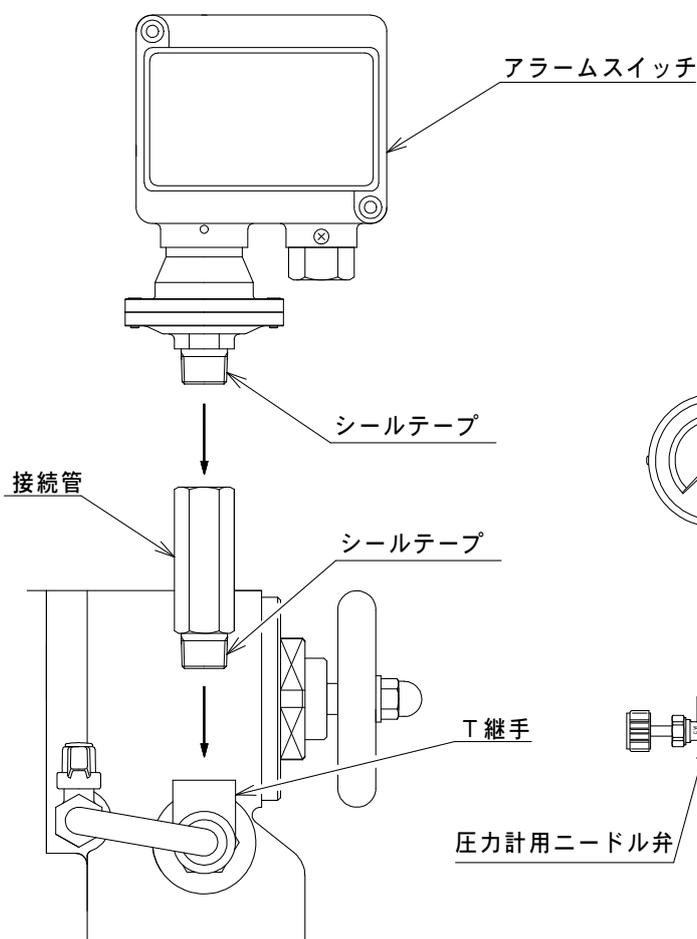
※1 流水検知装置は下記3種類のセット品を用意いたしております。

1. 単体 ————— 流水検知装置と上記付属品
2. バタ弁付き ————— 単体及びバタ弁（制御弁）、相フランジ（溶接用）、フランジパッキン、フランジ用ボルトナット。
3. ゲート弁付き ————— 単体及びゲート弁（制御弁）、相フランジ（溶接用）、フランジパッキン、フランジ用ボルトナット



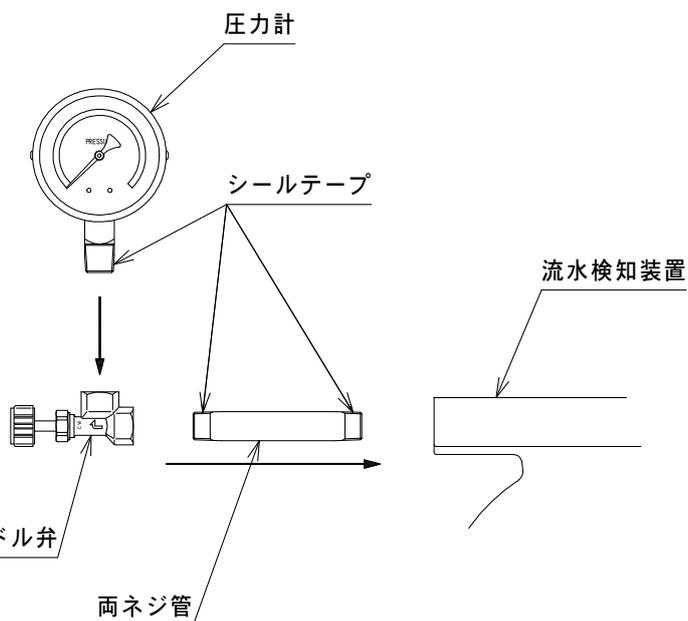
## A. アラームスイッチの取り付け

1. 接続管にシールテープを巻き、流水検知装置前部にあるT継手に取り付けます。
2. アラームスイッチネジ部にシールテープを巻き、接続管に取り付けます。
3. 最後に結線を行って下さい。



## B. 圧力計の取り付け

1. 流水検知装置のフランジ部前面にある上下2カ所（1次側、2次側）のRc3/8のねじ穴は圧力計の取り出し口です。
2. 両ネジ管にシールテープを巻いて取り付けます。
3. 圧力計用ニードル弁を図の方向で両ネジ管に取り付けます。
4. 最後に圧力計にシールテープを巻いて圧力計用ニードル弁に取り付けます。



# 流水検知装置の働き

## A. 流水の検知

流水検知装置はスプリンクラーヘッドの作動放水等による管内の流水により弁開し、その流水圧力によりアラームスイッチを作動させて電気信号に変換し、警報、ポンプ起動等の自動警報装置の発信部とするものでスプリンクラー設備等に使用する自動警報弁です。

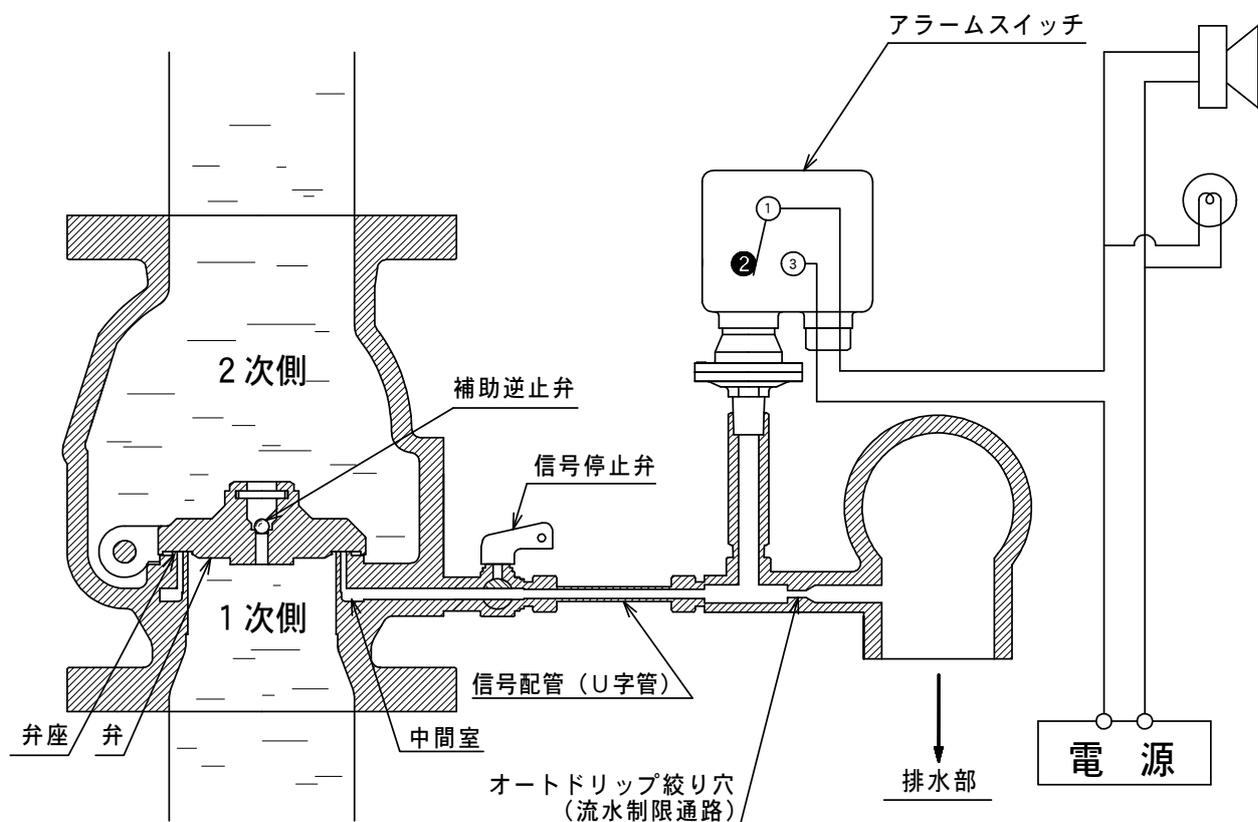
## B. 補助逆止弁

補助逆止弁は、通常2次側配管内圧力が低下した場合、弁（主弁）を開くことなく1次側から2次側への小流水の供給を可能にしています。従いまして、弁に小流水が通過しても弁は開かないので信号は出ず、誤報の防止機能にしています。

## C. アラームスイッチ

流水検知装置は通常、弁の圧力比により弁（主弁）が弁座（シート）に押圧されて、1次側、2次側、中間室を分離し、弁閉状態にあります。スプリンクラーヘッドが作動放水して弁の2次側圧力が低下すると、弁が開き1次側から2次側へ流水が発生します。この流水の一部は信号水として中間室から信号配管を通過して流水制限通路であるオートドリップ穴から排水部に放水されます。アラームスイッチは信号配管に通じているので、この流水圧力はアラームスイッチを加圧作動させ、電気接点を継ぎ電気信号の発信部とするものです。このアラームスイッチはエアータイマーを備えており、通常時のポンプ起動等による配管内の圧力変動でおきる瞬間的な弁開による誤報の発生を防止しています。

流水検知装置通常状態図



## D、オートドリップ

弁開により、中間室に流入する信号水は信号配管を通過してオートドリップ穴から連続的に放水されます。

このオートドリップ穴は細く絞って放水量を制限して信号水の圧力保持を行い信号配管内部を加圧するとともにその圧力でアラームスイッチを作動させます。又、弁が閉じ信号水の供給がたたれると、信号配管内部とアラームスイッチの圧力は、このオートドリップ穴から排水されて大気圧になるのでアラームスイッチは復帰し信号は停止します。

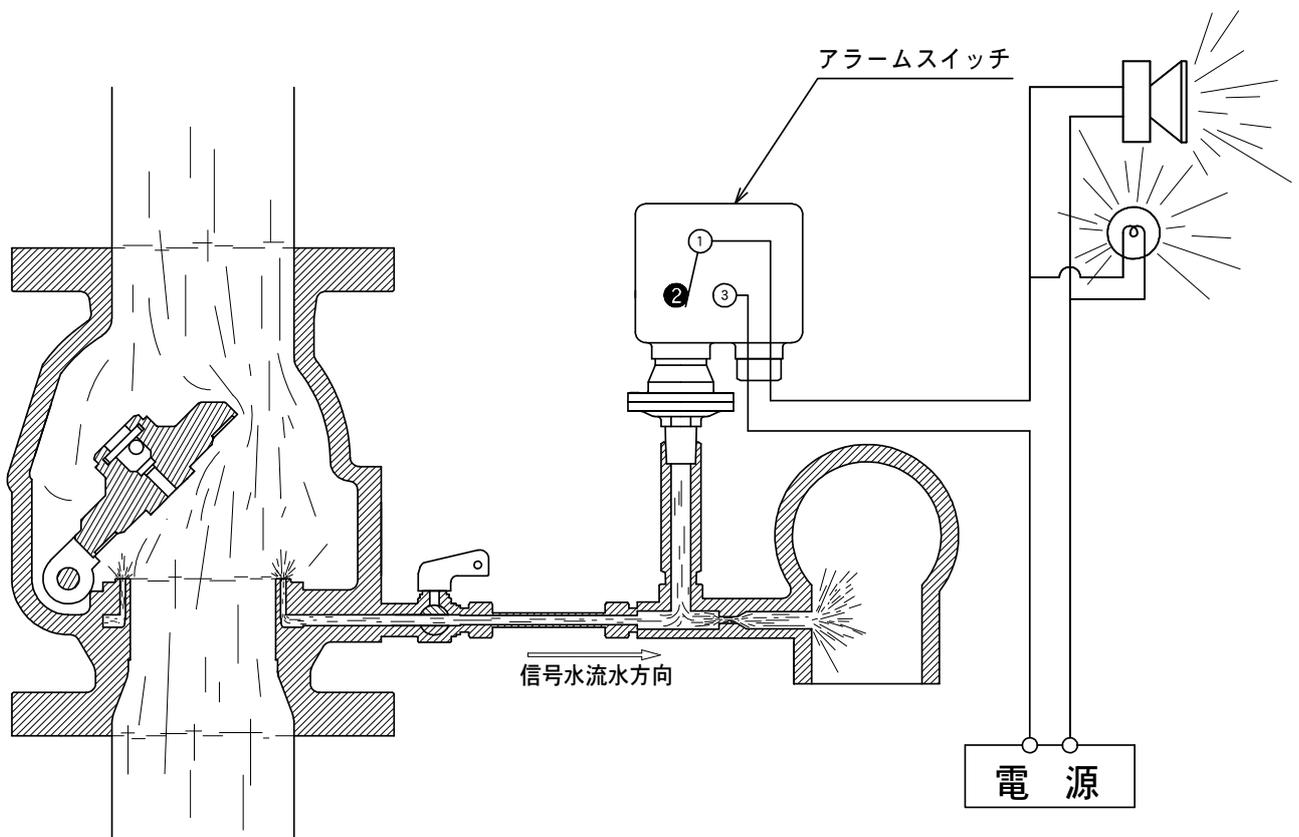
## E、信号停止弁

信号停止弁を閉めると流水検知装置の作動している時であっても、強制的に信号を停止する事ができます。

流水検知装置設置後、配管内に水をはる時や、末端試験弁からのエア抜きをする時、又排水弁から排水する時など信号停止弁を閉めておくと、アラームスイッチを作動させる事なく作業が行えます。又配管のエアによる漏れ試験の時も閉めておいて下さい。

尚、通常時には必ず信号停止弁を開けておいて下さい。信号停止弁が閉まっていると、火災時に流水検知装置が弁開してもアラームスイッチが作動しません。

流水検知装置作動状態図



# 現場配管上の注意

## A. 作動時間について

末端試験弁を開くと、まず2次側配管内の圧力低下が始まります。そして一定の圧力まで低下して初めて流水検知装置が弁開して流水が発生します。この間の時間は2次側の配管容積と残溜空気量によって異なります。

又、2次側配管の圧力の低下が始まり、弁開に至るまでには補助逆止弁から2次側へ小流水の供給があり、一定の流量を越えた時点で初めて主弁が開き信号配管へ水が流れて圧力スイッチであるアラームスイッチが起動します。

このアラームスイッチはエアタイマーを備えており、約10～15秒の遅延時間に設定しています。すなわち末端試験弁を開くと、まず2次側配管の圧力が下がり、補助逆止弁による圧力供給が始まり、続いて主弁が開き最後にアラームスイッチのタイマー遅延時間経過後、アラームスイッチが作動（ON）となります。

従って末端試験弁の開放からアラームスイッチの作動までに時間がかかりますが、さらに配管内に多量の空気溜まりがある場合はこの影響が大きくアラームスイッチの作動までには相当な時間を要する場合があります。配管内には出来るだけ空気溜まりが出来ない配管として設置してください。

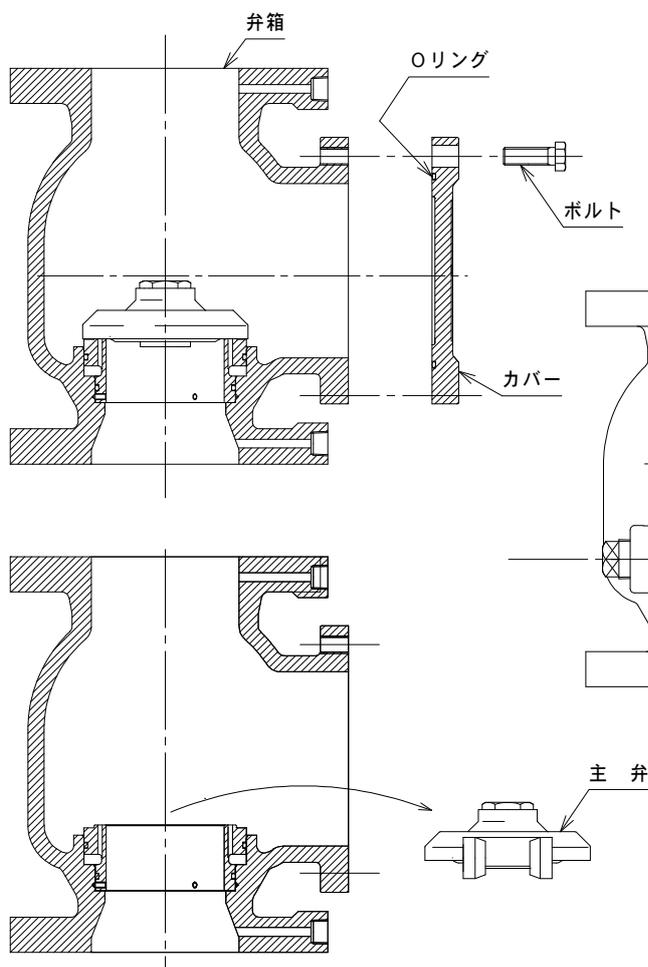
## B. 残溜空気による影響

流水検知装置の2次側配管に大量に残ったエアは作動時間の遅れや作動が安定しないなど、流水検知装置の機能に悪影響を及ぼしますので2次側配管には出来るだけ空気の残らないよう留意した設計にしてください。特に横引きの太い配管の立ち下がりのある場合（鳥居配管）及びループ配管はエアが抜けにくいので注意して下さい。

# 流水検知装置の 構造と分解

## A. 流水検知装置の分解の用意

1. 最初に制御弁と信号停止弁を閉めて下さい。
2. 排水弁を全開にして2次側配管の水を排水して下さい。この時末端試験装置も開いて排水を行って下さい。
3. 2次側の圧力計用ニードル弁を全開にした後、圧力計がゼロになったのを確認して下さい。又、排水弁からの排水音がなくなった後も少量の水が排水されていますので、十分に時間をおいて完全に排水をしてから分解を始めして下さい。



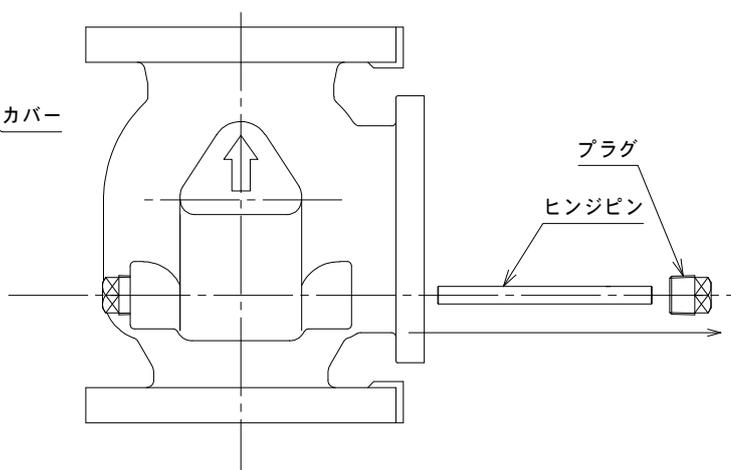
## B. 主弁の取り外し

1. 流水検知装置本体前面に取り付けたカバーを外します。カバーを取り付けているボルト全数をゆるめた状態にして、カバーの側部をプラスチックハンマーで軽くたたくと、カバーが本体から離れます。この時、カバーの落下には十分ご注意下さい。その後ボルトを抜き取りカバーを外して下さい。カバーの内側にはOリングが装着してあります。傷を付けないように注意して下さい。

### 注意⚠

カバーの取り外しは、2次側の圧力がゼロである事を確認の上、ボルトをゆるめてください。内部に圧力のかかった状態でボルトをゆるめるとボルトが切れたり、カバーが破壊して人身事故や水損事故が発生したりするおそれがあります。

2. 次に左下にあるプラグを取り外し、主弁を支持するヒンジピンを抜き取って下さい。
3. 主弁を軽く持ち上げ外部に取り出して下さい。



## C. 主弁の分解

主弁の分解は弁体とパッキンとパッキン押さえからなるディスク部を固定し、補助逆止弁ケース上部の六角部分を回す事によって分解できます。ディスクの主弁とパッキン押さえがパッキンで固着され、はずれない場合があります。この時は補助逆止弁六角部にスパナを掛けて、主弁から約5mm浮く状態まで補助逆止弁をゆるめた後、プラスチックハンマーなどで補助逆止弁の頭をたたくとパッキンは簡単にはずれます。

次に補助逆止弁ケースのボールストッパーを抜き取るとチャッキボールを取り出す事ができます。

## D. 主弁組立時の注意

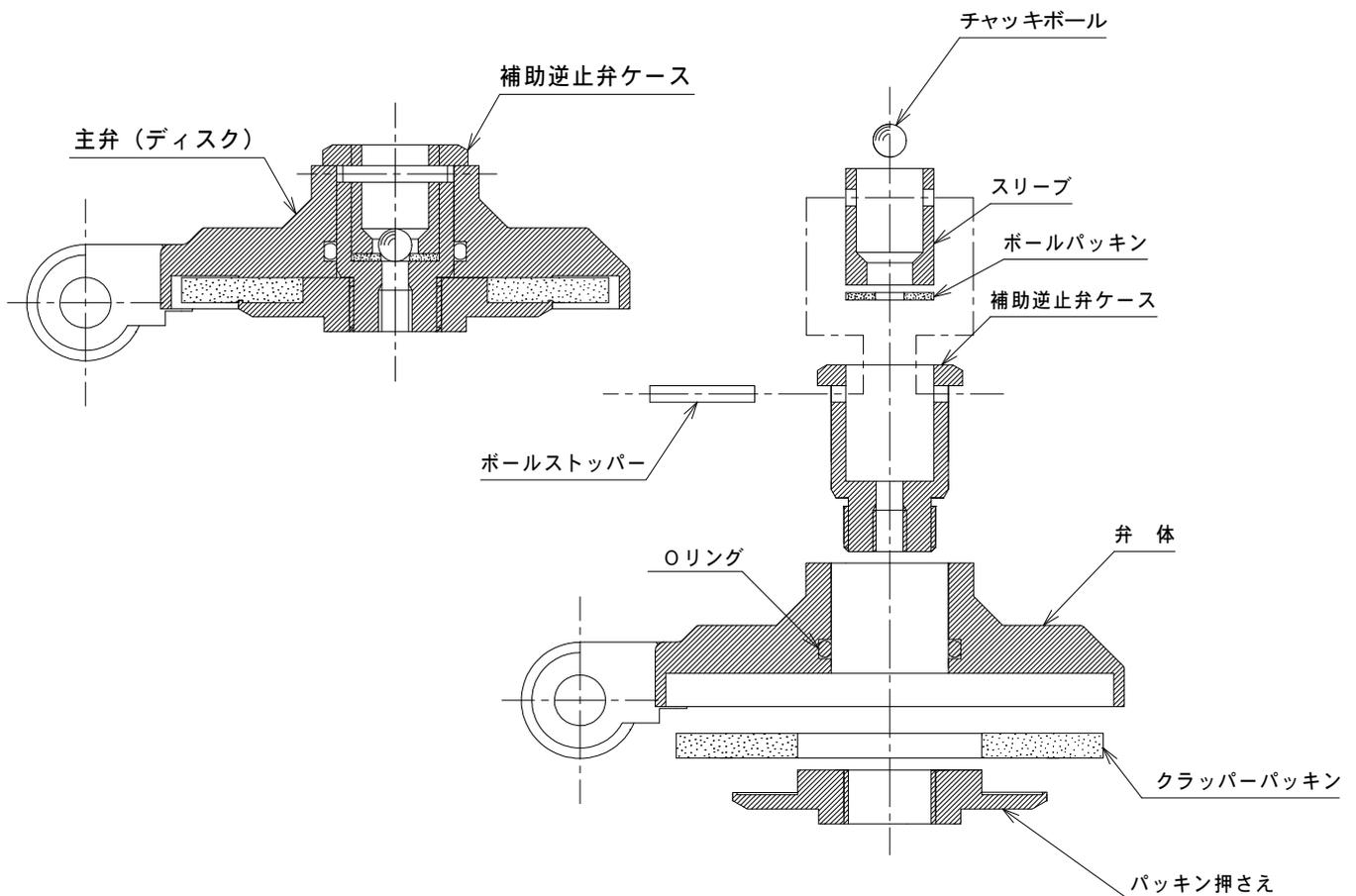
主弁組立の際はOリングやパッキンなどに異物が付着していないか、またもと通りにセットされているかを確認してください。

## E. カバーの取り付け

1. 組み立てた主弁を弁箱内に、もと通り納めてください。
2. 次にヒンジピンを差し込みますが、弁箱内のヒンジの穴に合わせるように主弁を動かしながらヒンジピンを元のように差し込んでください。
3. プラグは前もってシールテープを巻いた物を取り付け、締めてください。
4. カバーを本体に取り付けますが、カバーの内側のOリングが溝から外れないよう、また異物が付着しないよう注意してください。

カバーはボルトでもと通り本体に取り付けて下さい。この時ボルトは均等に締め付けてください。

**注意**▲ ボルトの閉め忘れ及び片締めは内部に圧力が加わった時、ボルトが切れたりカバーが破損して人身事故や水損事故が発生する恐れがあります。注意して下さい。



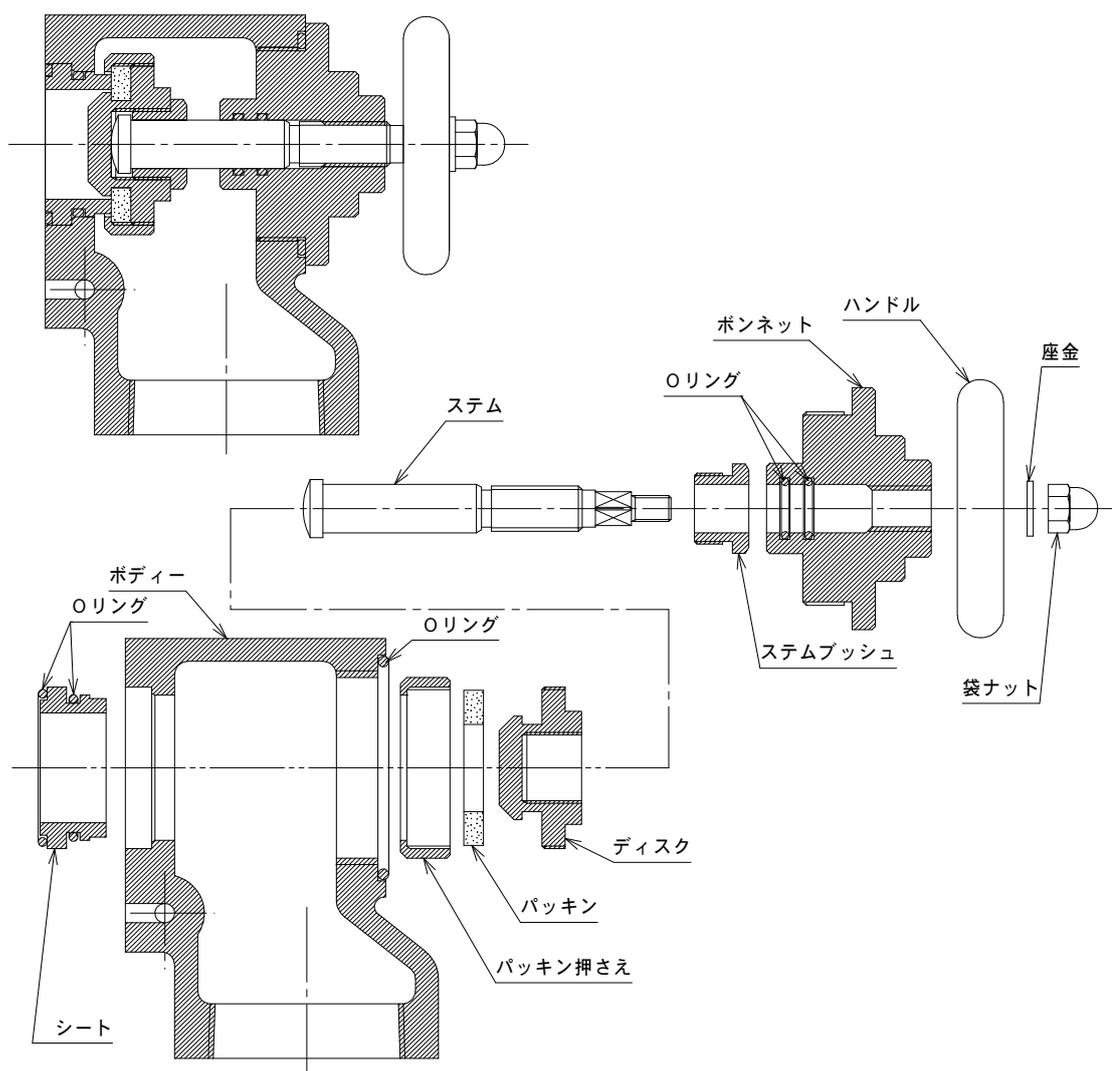
## F. 排水弁の分解

まずボンネットを回してステム、パッキン等の組立品全体をボディーから抜き取ります。次にディスクからパッキン押さえを取り外します。この状態で排水弁パッキンの交換はおこなえます。さらに袋ナットをはずしハンドル、ステムブッシュ、ボンネットをとりはずすと全て分解ができます。

尚、シートは流水検知装置本体から排水弁ボディーをはずすと取り外せますが通常は取り外す必要はありません。

排水弁の分解は流水検知装置の2次側の圧力がゼロであること及び2次側の完全排水を確認の上、分解を始めて下さい。

**注意**▲ 流水検知装置内部に圧力の有る時及び水の張った状態で分解をすると水が外部に噴出します。人身事故や水損事故の恐れがあります。注意してください。



## G. 排水弁の組み立て

排水弁はもと通り組み立ててください。ボンネットを排水弁ボディーのネジに締め付けますが、あらかじめ弁開状態であるように、ハンドルを開弁方向に回しておいた後、ボンネットネジを締め付けて下さい。ネジは最後まできつく締めて下さい。またボンネットをボディーに締め付ける際には弁開の方向に十分にハンドルを回した後、取り付けて下さい。

尚、組立の際はパッキン及びOリングに異物が付着しないよう、又破損しないように注意して下さい。

ボンネットを確実に締め付けて下さい。締め付けがゆるい場合、ハンドルを廻すとボンネットが廻りはずれることがあり、内部の圧水が噴出することが考えられます。人身事故や水損事故が発生する恐れがあります。注意してください。

## オートドリップ穴の掃除

オートドリップ穴（絞り通水路）に異物が詰まると誤報の信号が出たり、スイッチが復帰しなくなったりします。オートドリップ穴は、必ず掃除を行って下さい。掃除は以下の手順で行ってください。

1. 信号停止弁と制御弁を閉めます。
2. 信号停止弁側とリングジョイント側の両方のリングナットを緩めて外します。
3. 信号水管（U字管）を抜き取ります。
4. 針金等の細い物をリングジョイントの穴から奥に差し込んで、オートドリップ穴の掃除を行って下さい。

信号水管は流水検知装置の作動時に水が流れますが、待機時に水は流れず圧力も大気圧となっています。そのため待機状態で分解することができます。しかし掃除の際には念のため信号停止弁と制御弁を閉めて作業を行って下さい。

尚、スプリンクラー配管内の異物を洗い流すフラッシング作業の後におきましても必ず、オートドリップ穴等の掃除を行って下さい。（3ページの「フラッシングを行って下さい。」参照）

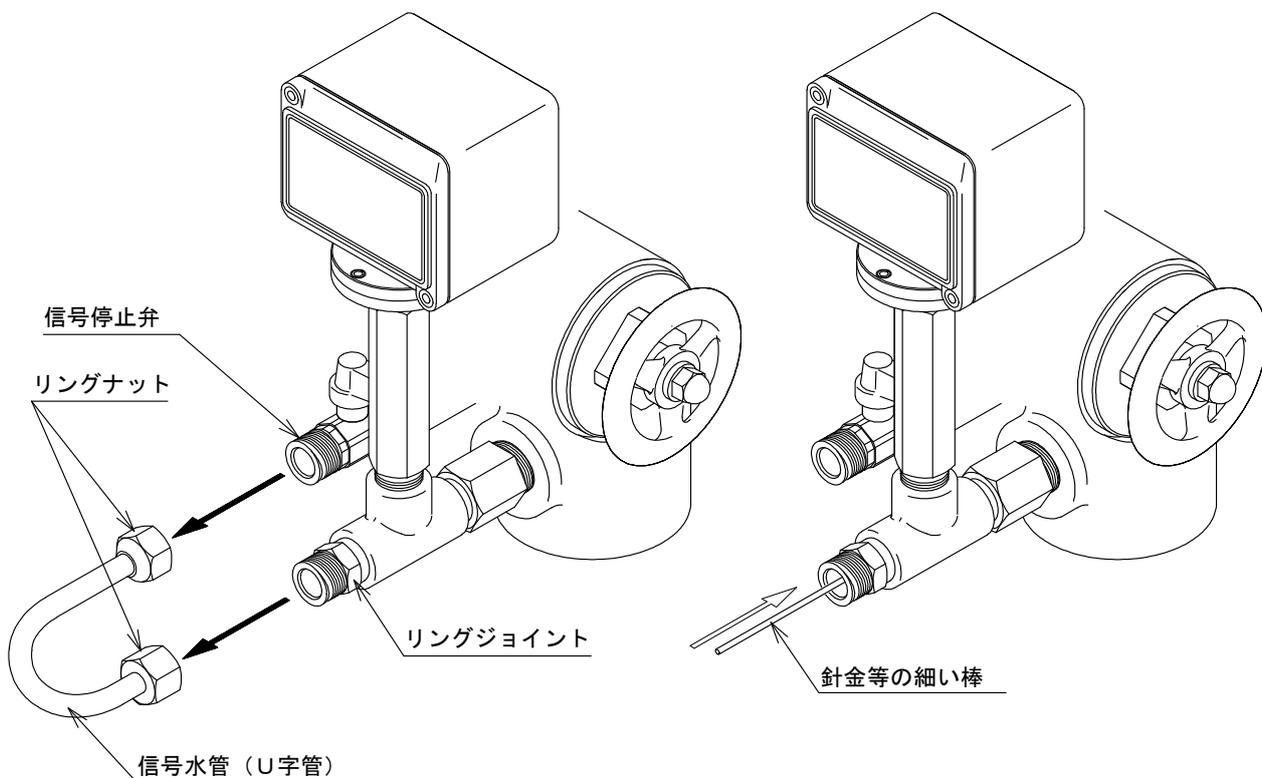
**警告**  オートドリップ体のオートドリップ穴に異物が詰まると流水検知装置の主弁が閉じて、信号水の供給が断たれても信号配管内の水圧が排水側へ抜けなためアラームスイッチが復帰できなくなり火災信号が停まらず、誤報を引き起こします。

制御弁が開いたままで信号配管を分解しますと、排水弁及び末端試験弁を開けると分解部分から水がふき出し、人身事故や水損事故が発生する恐れがあります。注意して下さい

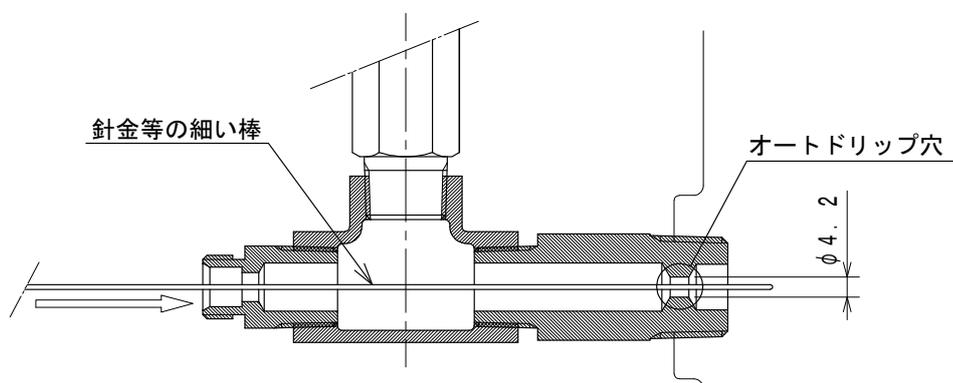
掃除完了後は、元通りに組み立ててください。

リングナットを緩めて外し、信号水管（U字管）を抜き取ります。

針金等の細い棒をリングジョイントの穴から差し込んでオートドリップ穴の掃除を行います。



リングジョイント穴からオートドリップの穴までは約110mm  
あるので、それ以上の十分な長さの細い棒をご用意下さい。  
尚、オートドリップ穴径は4.2mmです。



# アラームスイッチについて

アラームスイッチは圧力スイッチになっており信号配管内圧力をダイヤフラムで検知する事によって、内部のマイクロスイッチが作動 (ON) する仕組みになっています。

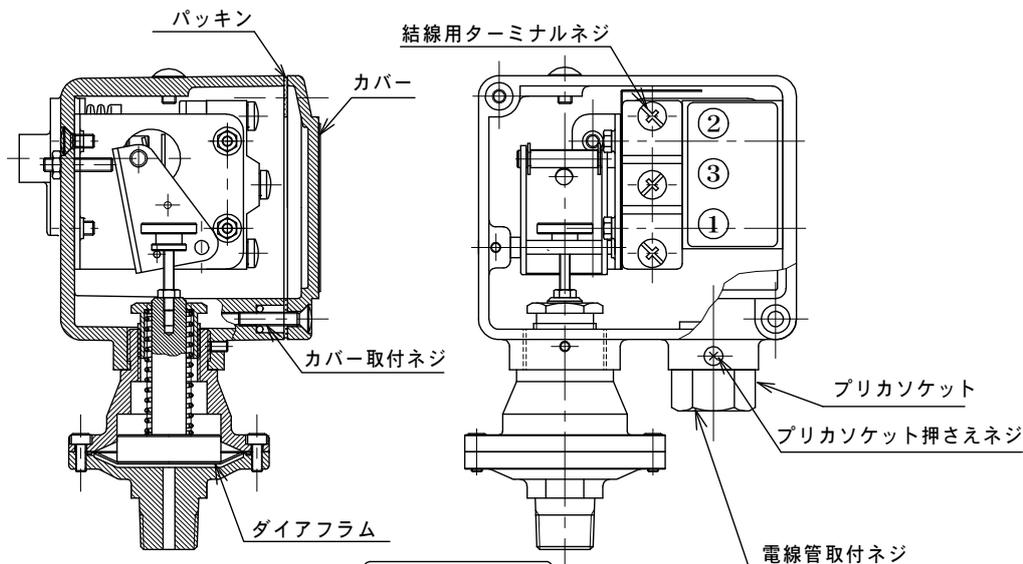
またなんらかの原因でポンプが起動した場合の瞬間的な弁開作動による誤報防止のため、アラームスイッチ内にはエアタイマーが組み込まれており主弁の弁開後約 10 秒から 15 秒で信号が出るようになっています。また作動圧力は 0.01~0.03MPa となっており、これ以上の圧力が加わるとスイッチは起動します。

アラームスイッチは非常に精密な構造になっていますので絶対に衝撃を加えないでください。

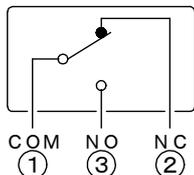
またカバー取り付けネジ、結線用のターミナルネジ及びプリカソケット押さえネジ以外のねじやナット類等は絶対にさわらないでください。

アラームスイッチのエアタイマーは弊社内のタイマー調整装置にて調整していますので現場でのタイマー調整は絶対にしないでください。

またアラームスイッチボックス内部にゴミや水が入り込まないように必要時以外はカバーをしっかりと閉めておいてください。



尚、通常アラームスイッチへの結線はターミナル①と③につなぎます。



スイッチ内部結線図

製品名 TH型アラームスイッチ (エアタイマー式)			
定格 (抵抗負荷)	電圧 (V)	30	125
	電流 (A)	AC	0.1
		DC	0.1
結線端子番号	①~③ 常時開路	①~② 常時閉路	
作動圧力	0.01~0.03 MPa		
作動遅延時間	7.5 ~ 15 sec		

## 排水側への漏れが発生した場合

排水側への漏れは、主弁からの漏れ又は排水弁からの漏れの2種類があります。信号停止弁を閉にした状態で排水側への漏れが止まる時は、主弁と弁座の間の漏れです。

信号停止弁を閉にしても漏れが止まらない場合は、排水弁のパッキンとシートの間の漏れです。いずれの場合も水中の異物が起因するもので、結果1次側と2次側の圧力低下を引き起こします。

### A. 主弁からの漏れの対策

主弁のクラッパーパーパッキンと弁座の間に水中の異物が挟み込んだ場合は、クラッパーパーパッキンの密接不良が起き、中間室への漏れが発生して排水部に流れ出す事になります。この異物は、ほとんどの場合、フラッシングをすることで排水弁から排水部へ流れ出し、異物を取り除くことが出来ます。

#### 【異物を取り除くためのフラッシング】

- ① 信号停止弁を閉じて信号を出ないようにしておいて下さい。
- ② 排水弁を半開以上に開けて多量の水を排水させて下さい。ポンプが起動しますが、その状態で多量の水を排水させると、当然ながら主弁が開き、挟まっていた異物が水に流されて排水部に排出されます。
- ③ 排水弁を閉鎖した後、信号停止弁を開けて排水部への漏れが止まったかを確認して下さい。

#### 【フラッシングをしても漏れが止まらない場合】

フラッシングを行ったが漏れが止まらない時は流水検知装置を分解して挟まっている異物を取り除くか、又異物により損傷しているクラッパーパーパッキンを新品に取り替える事になります。

- ① 本誌「流水検知装置の構造と分解」(10ページ参照)の項にそって分解し、主弁を取り出して下さい。
- ② 主弁のクラッパーパーパッキン及び弁座に異物がないかを確認して下さい。異物があった場合は取り除いて下さい。
- ③ 主弁側のクラッパーパーパッキンの表面に異物によって発生した傷がないかを確認して下さい。傷がある場合はクラッパーパーパッキンを新品に交

換して下さい。

- ④ 弁座表面に異常な傷がないか、又、弁座外周部の弁箱窪み部及び弁箱のヒンジピン通孔部付近等全域に異物がないかを指先で探って調べて下さい。異物があった場合は全てきれいに取り除いて下さい。
- ⑤ 本誌「流水検知装置の構造と分解」(10ページ参照)の項にそって元通りに組み立てて下さい。

### B. 排水弁からの漏れの対策

排水弁からの漏れは、排水弁パッキンとシートの間に異物が挟み込みパッキンとシートの密接不良が原因です。この場合排水弁を全開して挟まった異物を排水部に流し出すことで、ほとんどの場合解決します。

排水弁を全開にして排水したにも関わらず、漏れが止まらない場合。

- ① 本誌「流水検知装置の構造と分解」(12ページ参照)の項にそって排水弁を分解してパッキンとシートについている異物を取り除いて下さい。
- ② パッキン表面に異物による傷がないかを確認して下さい。傷のある場合はパッキンを新品に取り替えて下さい。
- ③ 本誌「流水検知装置の構造と分解」(12ページ参照)の項にそって元通り組み立てて下さい。

## アラームスイッチが復帰しない場合

平常時、主弁が閉状態にも関わらず、アラームスイッチが復帰せず、信号が出たままになった場合は、オートドリップ穴に水中の異物が詰まり排水不能となっていますので、信号停止弁を閉にしてから先ずオートドリップ穴を掃除して異物を取り除いて下さい。オートドリップ穴の掃除方法は 13 ページの「オートドリップ穴の掃除」を参照して下さい。

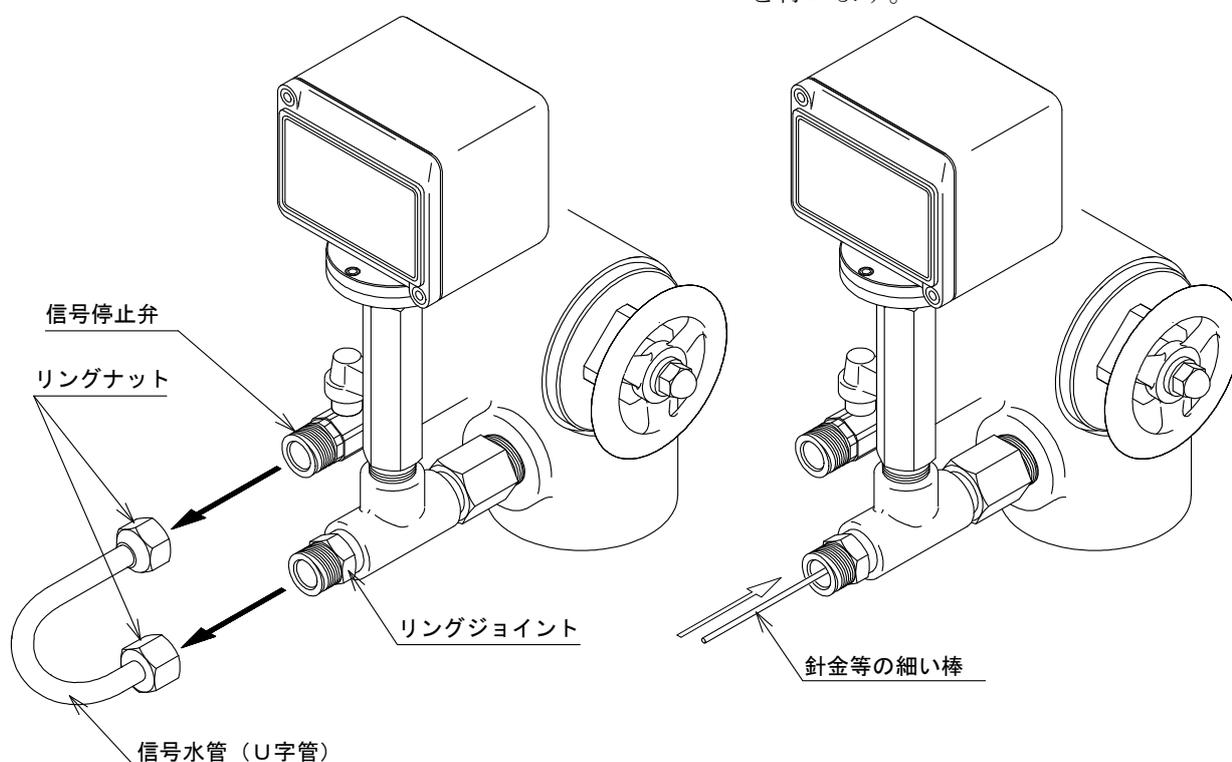
# 定期点検時のお願い

オートドリップ体のストレーナー穴には消火用水中の異物が詰まる恐れがあります。定期点検の時には必ず総ての系統の流水検知装置のオートドリップ穴の掃除を行って下さい。この穴が詰まるとアラームスイッチが復帰しなくなったり、誤報の原因となります。オートドリップ穴は流数検知装置を正面から見て右下の信号水管（U字管）を取り外したリングジョイント穴の奥にあります。

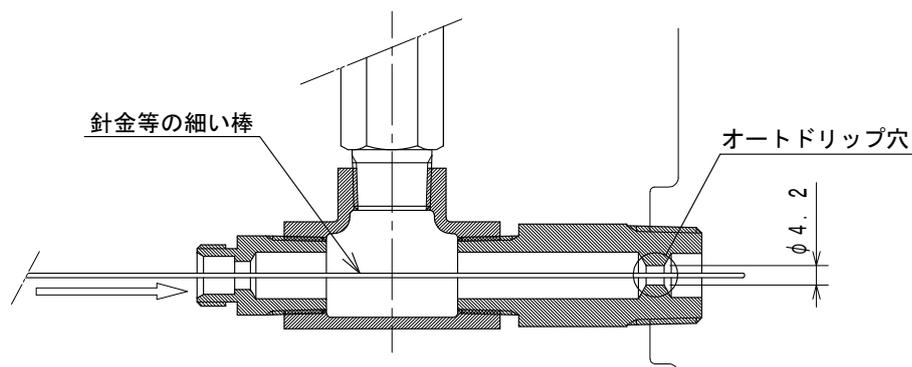
オートドリップ穴の掃除はまず信号停止弁を閉めた状態とし、信号停止弁側とリングジョイント側の両方のリングナットを緩めて外し、信号水管（U字管）を外してください。次に針金等の細い物をリングジョイントの穴より差し込み、奥にあるオートドリップ穴を掃除してください。掃除が完了した後は、信号水管を信号停止弁とリングジョイントに差し込みリングナットを締め付けて組み立てます。この時、信号水管の短い方がリングジョイント側、長い方が信号停止弁側となります。

リングナットを緩めて外し、信号水管（U字管）を抜き取ります。

針金等の細い棒をリングジョイントの穴から差し込んでオートドリップ穴の掃除を行います。



リングジョイント穴からオートドリップの穴までは約110mmあるので、それ以上の十分な長さの細い棒をご用意下さい。尚、オートドリップ穴径は4.2mmです。



## 仕 様

製品名	B S 125-50(A)型、B S 150-50(A)型
呼び圧力	10k
使用圧力範囲	0.15～1.4MPa
検知流量定数	50・60（併用型）
不作動流量	5L/min 以下
取付方向	縦

### BS125-50(A) (125A)

最大流量	3300L/min
圧力損失値	6.5m 直管相当長さ
質 量	54kgf

### BS150-50(A) (150A)

最大流量	4800L/min
圧力損失値	14.1m 直管相当長さ
質 量	61kgf

「B S(A)型アラーム弁取扱い説明書」

製作、著作 アイエスプリンクラー株式会社

2009.8.1